

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

公開講演会：マヤが教えてくれるもの

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4372

公開講演会

マヤが教えてくれるもの

国立民族学博物館教授
八杉 佳穂

新大陸の文明といえば、マヤ・アステカ・インカがすぐ浮かぶが、そうした新大陸の諸文明の最大の特徴を一言でいえば、旧大陸の諸文明との接触がなく独自に発達したことであろう。それゆえ、旧大陸で発達した文明論や学問を検証する上でもこの上ない材料を提供してくれるのであるが、残念ながら、学問の対象として取りあげられることはいまだに少ない。新大陸には、トウモロコシ、トマト、トウガラシ、ジャガイモ、サツマイモ、アボカド、カカオなど、原産の植物がたくさんある。こうした植物がなければ、現在の食生活は貧しいものになったばかりか、60億を超える人口を養えなかったであろうから、そうした意味でも新大陸のことを考えてみる必要がある。

新大陸の人々は、16世紀にヨーロッパ文明と接することになったが、それにより人口が1/10に減少したといわれている。それはペストなどの疫病と比較にならないほど人類史上まれにみるおそろしい出来事である。その後文化変容を受けたことも人類史を考える上でたいへん重要な地域である。

新大陸の数ある文明の中で、もっとも文字を発展させたのがマヤ文明である。マヤ文明はメソアメリカの東端で栄えた文明である。メソアメリカとは中米の真ん中部分を指す文化領域であり、そこにはオルメカやサポテカ、アステカなどの文明が栄えた。たくさんの異なる言語があり、自然環境も変化に富んでいる。そうした多様性が、メソアメリカに文明を生ませたのであろう。紀元前1200年頃メソアメリカの母なる文明とも称されているオルメカ文明がテワンテペック地峡のメキシコ湾岸熱帯低地で花開いた。その後モンテ・アルバンやテオティワカン

などの都市が高地で、熱帯低地では、マヤ文明が栄えた。

マヤの地に人が住み始めたのはいまから1万年以上も前のことであるが、土器を持ち、トウモロコシを基盤にした定住生活が始まったのは、紀元前1000年頃である。そして前700年～前400年には20メートルを超える神殿ピラミッドの建築が始まり、前400年～後100年には、川もなく水資源に乏し



ヤシュチランの41号リントル



八杉 佳穂 Yoshiho Yasugi

国立民族学博物館教授／中米言語学、文字学、中米文化史

1950年広島県生まれ。1972年京都大学工学部卒業。1975年京都大学文学部卒業。現在、国立民族学博物館教授。総合研究大学院大学教授。文学博士。

主著に、『マヤ文字を書いてみよう読んでみよう』（白水社）、『チョコレート文化誌』（世界思想社）、『マヤ文字を解く』（中央公論新社）、『マヤ学を学ぶ人のために』（編著、世界思想社）など。

い低地南部の真ん中あたりで、都市の発展が急速に進み始めた。たとえば、メキシコの国境近くのグアテマラのジャングルの中にあるエル・ミラドルでは、高さが72メートル、55メートル、48メートルにも及び巨大なピラミッド群が建てられた。定住生活が始まってからわずか数百年である。数千年かかったオリエントとはだいぶ異なる。しかし100～250年には、その多くが放棄されてしまった。9世紀～10世紀初頭に放棄された最盛期マヤ文明と同じようなことがこの時期に起こったのである。

マヤ文明の絶頂期は3世紀末から10世紀初頭の約600年である。その時代を古典期という。ちなみに、それ以前を先古典期（または形成期）、それ以後を後古典期という。

古典期は、600年頃までの前期とそれ以後900年までの後期に分けられる。石器しかない道具で、しかも人力だけで、旧大陸からみると、「原始的」ともいえる手段で、巨大なピラミッドや神殿などを持つ都市を建設し、都市と都市のネットワークを築いた。そして石碑や祭壇などに文字を刻んだ。さらに精緻にして美しい彩色土器を数々作り出したばかりでなく、翡翠や黒曜石などを用いて繊細な工芸品を生み出した。球技場では、よく跳ねるゴムのボールを使った球技が行われた。

古典期は、言い換えると、文字を用いて自分たちの歴史を書き残した時代である。ふつう16世紀にスペイン人に征服されて以後が歴史時代といわれるが、マヤでは3世紀には文字を持っていたのだから、歴史時代がすでに始まっていたといえる。王やその家族などがいつ生まれ、いつ結婚し、いつ即位し、いつ死んだかなどが、文字の解読からほぼわかっている。家系図さえできている。王を中心にまとまったクニが互いに覇を競い合ったり、同盟したりした動的な世界が文字の解読から描かれるようになっていく。

神々や王朝の歴史を綴ってきたマヤ文字は、日本語の漢字仮名交じりに似ている。意味を表わす漢字と音を表わす仮名がうまく混じり合って日本語は表記されるが、マヤ文字も同じように、意味を表わす表語文字と音を表わす表音文字がある。さらに送り仮名があるし、振り仮名もある。

歴史をしるすには、暦が必要である。石碑のほとんどすべてに暦の文字がみられるが、400を超す石碑には、紀元前3114年の9月6日（または8日）を暦元とする長期暦がしるされている。その暦は、キン（1日）、ウィナル（20日）、トゥン（360日）、カトゥン（20 x 360日）、



ティカルの1号神殿

バクトゥン(20×20×360日)という5つの単位で数えられた。それは一直線に流れる時を20進法でうまくとらえたものである。ところが時は、一直線に流れるとともに、季節が繰り返すこととわかるように循環するものでもある。時の循環する性質は、260日暦と365日暦の2つを用いて表わされた。2つの循環暦を組み合わせることで52年周期の暦ができるが、さらにトゥンやカトゥンの終わりの日と組み合わせたり、7日暦や9日暦などと組み合わせることで時を表わしたので、複雑な暦の体系となった。マヤ人は、そうした複雑な暦を用いて歴史

を刻んだばかりか、暦から歴史の循環性を演繹して、予言に用いたりしていた。

暦元の日、マヤの歴史が始まる遙か以前のことである。記録に残る歴史上最初の日、暦元の日から124万3615日後の292年7月6日である。そうした遠い神話的な日を暦元に定めた暦を用いていたので、日常でも長大な数を扱っていたのだが、驚くことに、トゥン(360日)の20の21乗というとても数まで数えていた。だからマヤ人は、暦の計算に没頭した民族と誤解されるほどである。ところがその精緻な暦は、マヤのすぐ西にいるテワンテペック地峡を挟み、メキシコ湾岸と太平洋沿岸の低地帯に住んでいた人から受け継いで、それを発展させたものであった。マヤ文明は個性的な文明とみられがちであるが、たえず西にあったメソアメリカの諸文明から影響を受けて改良していった文明であった。西の文明からの影響を絶えず受けてきた日本と同じように、マヤ文明も西の人から絶えず影響を受けて発展していったのである。

それぞれの都市は、特徴ある建築群を建て、個性を発揮している。たとえばティカルでは、高層のピラミッドが6つも建てられたのに対し、ヤシュチランでは、屋根飾りのある建物の入り口の上に、人物と文字を刻み込んだリントル(まぐさ石)をつけることに精力を費やした。コパンでは、丸彫りに近い石碑をたくさん建立して、2000を超す文字を階段に刻んだ。それぞれが趣の異なる町を築いたのである。ところが、文字を共有し、土器も年代を決定できるほど、共通の器形を持っていた。同じものの共有と異なる個性がうまく発揮された文明といってもよいだろう。

マヤ文明はよく忽然と消え去った文明と喧伝されることが多いが、実際には8世紀から10世紀にかけて徐々に崩壊していった。一部の都市を除き、低地南部全体が放棄された。たとえば、ドス・ピラスでは戦争によって放棄されたことがわかったが、崩壊の原因については、いろいろ考えられてきたものの、いまだにはっきりしていない。おそらく寒冷湿潤から温暖乾燥へ気候が変化したことがきっかけに、干ばつ、都市間の争い、乱開発、人口過剰などいくつかの原因が絡み合って放棄されたと思われる。

De las letras que aquí faltan, en este caso, los
que están en la mano de la mujer para leer
las palabras y para leer y para leer más allá de los
caracteres especialmente la parte más importante
de los

しかし低地北部では、チチェン・イツァ、ウシュマル、エック・バラムなどで、逆に全盛期を迎えた。それ以後、ユカタン北部でマヤ文明は続く。後古典期と呼ばれる時代である。ウシュマルやチチェン・イツァは、現在世界遺産になっている華麗な遺跡であるが、それらも衰退し、13世紀からはマヤパンを中心に、小さな王国が競い合うようになる。しかし16世紀にスペイン人が到来する前は、災害や飢饉などで弱体化していた。そして圧倒的な武器の差によって少数のスペイン人に征服された。

マヤ研究は、考古学や碑文学など、古代マヤ人の残したもものから研究されるほかに、16世紀以降にアルファベットで書かれた歴史文書も用いられる。スペイン人などによる記述に加え、アルファベットを習い覚えたマヤ人自身が書いた歴史や神話、伝説などは、古代文明を解明する糸口を与えてくれている。さらに現在でも800万人ものマヤ人がいて、民族学や言語学などから研究されている。さまざまな角度から研究されうる3000年あまりの分厚い資料がある。だからマヤ学が成立する。

そうした研究は、西欧中心主義の学問や常識に疑問を投げかける材料をたくさん提供してくれる。たとえば、神々に満ちていた古代文明は一神教が逆に特殊であることを教えてくれる。文字のある社会から文字のない社会へ文化は流れるというが、メソアメリカでは、文字の発達していなかったテオティワカンから、文字の発達していたマヤへ影響が及んだ。また、文字は絵文字から表音文字に進化するといわれているが、サポテカやミシュテカ文明が栄えた地域では、文字を持っていた社会が文字による表現をやめ、絵でもって伝達するようになっていった。

これまでの常識を変えなければならぬ例を少し挙げたが、マヤの言語も、日本語とは異なり、他動詞の主語と自動詞の主語が違い、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ扱いを受ける、能格言語である。そして名詞に「が」とか「を」などの文法関係を示すものがつかず、動詞の方に接辞をつけて文法関係を示す主要部有徴言語である。つまり日本語やヨーロッパ諸語とはまったく逆の文法的手続きを取る言語である。日本語を反対から見るとマヤ諸語となるといってもよい。それを知ると、我々は、物事の半面しかみてこなかったことがわかる。

個々の世界観や歴史観、常識をもう一度考え直す必要があることを教えてくれるのが、新大陸の文明である。だから500年経ったいまでも新しい大陸なのである。

公開講演会

マヤが教えてくれるもの

講師 八杉佳穂
国立民族学博物館教授

2008.6.26(日)

開 場 13:15~14:45 ※開場12:45
会 場 東京女子大学 24202教室
[東京都目黒区新橋2-6-1]
アウトレイ 演習棟東館5F(新橋駅より徒歩15分)
「東京女子大前」下車
※ 入 東京女子大学比較文化研究所
[2008-06-26(日)開演] 13時開演
◎ <http://lab.lwcu.ac.jp/icsc/home.html>

申込不要・聴講無料・定員250名



東京女子大学比較文化研究所